
人殺し実験大好き集団

ネコガエル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人殺し実験大好き集団

【Nコード】

N3265Z

【作者名】

ネコガエル

【あらすじ】

2149年の日本。科学が進歩し、ある程度世界は安定していた。その陰で動き回り、巨大化していく人体研究機構。羅衣^{ライ}、雅砥^{ガト}、神蘭^{ラン}、紗魅^{サミ}、禍赦^{カシャ}がその真実を知る。
果たして、彼らの行く末とは、どんなものなのか……？

ブローグ 〱 羅衣 〱 (前書き)

これは、私の初の近未来小説です。
初心者なので色々と下手な所はあると思いますが、一生懸命書きま
す。

誰か1人でも「面白い!」と思ってくれたら私は幸せです。

ブローグ ー 羅衣 ー

休日、家族4人でドライブした。

行き先は、特に決まっていな。久しぶりの、家族全員での外出だ。

「父さーん」

呼びかけ、身を乗り出す。運転している父親の概螺ガイラは、前を向いたまま。

6人乗りの、一般的な自動車。だが、4人しか乗っていない。

「なんだ、羅衣ライ？」

それでも、返事をした。

「腹減った」

「羅衣は、腹減るの早いなあ。食べ盛りだもんな」

「おれも、減った」

羅衣の前に座っていた兄が、口を挟む。

「禍赦カシヤもか。それじゃあ、レストランでも行くか」

「お母さん、三ツ星レストランいきたいわあ」

母親の御籠ミコが、うつとりする。

「母さん、現実見ようよ」

「いいじゃない。夢見るのは自由よ。ほら、禍赦も想像してみたら？可愛い子から告白される所とか」

「それ、妄想って言うんだよ」

「禍赦は、グサツとくる事言うなあ」

「何で父さんが言うの？」

「いいじゃないか。お母さんは、夢見るのが趣味なんだぞ。『ああ、こっぴう人なんだからしょうがないか』とか思ってた聞き流しとけ」

「そうよ。その通りよ」

「母さん、何言われてるか分かってる？」

「もちろん」

「そうやって自信満々に即答されると、つつこむ気力も失せてくるよ……」

禍赦が溜め息をつく。

「どうしたの？ 具合悪いの？」

「疲れた……」

誰のせいだよコノヤロウとか思いながら、返事する。

「なんだと？ もう酔ったのか？」

「『疲れた』がどうやったら『酔った』に聞こえるんだよ」

「あ！ レストラン発見！」

ふいに、ずっと外を見ていた羅衣が叫んだ。

十字路の前で、信号待ちしていた時だ。

「え？ どこ？」

御籠が窓の外を覗き込む。

「ほら、あそこ。看板見えるだろ？」

「あ、本当だ」

御籠ではなく、禍赦が答えた。

概螺もレストランを見つけたようだった。
信号が青になる。

右に曲がる。レストランのある方向だ。

「よし、じゃあそこで……危ない！」

グイッと体が左に引つ張られる。

「うわっ」

バランスを失い、禍赦にぶつかる。

概螺が急にハンドルをきったようだ。

「うわぁっ」

概螺の叫び声を聞いたその刹那、様々なものが羅衣を襲う。

体に響く、衝撃。ガラスが割れる音。何かが碎ける音。悲鳴。激痛。

「う……」

目を開ける。とたん、呆然とする。

「嘘……だろ」

車は、めちゃくちゃになっていた。

「嘘だろ。そんな……」

目の前は、真っ赤に染まっていた。

「そんな……」

足が、痛い。だが、見る事が出来ない。

今、目の前にあるものから目を逸らす事が出来ない。

「そんな……」

今、目の前にあるものが理解出来ない。

今、目の前にあるものが現実とは思えない。

だが、確かにそれは現実だった。そこに、残酷な現実として存在していた。

「羅……衣？……痛っ」

ハッとする。禍赦に視線を移す。

禍赦が身動きしたのだ。

「禍赦、大丈夫か？」

身動きしにくい半壊状態の車の中、禍赦の顔を覗き込む。

禍赦の髪が赤く濡れていた。

「頭切ったみた……うつ」

「禍赦！？」

「……嘘だろ」

禍赦がある事に気付いた。

「父さんと母さんが……死んだ？」

その言葉は、心に突き刺さった。

トウサントカアサンガシンダ

父サント 母サンガ 死ンダ

父さんと母さんが死んだ。

ふいに、実感というものが生まれた。

喪失感。悲しみ。後悔。その他諸々。

それらが体を、心を満たす。

気付いた時には、叫んでいた。

悲しみが、叫びとなって口から迸る。涙となって目から溢れる。

止められない。叫びも、涙も、止まらない。

自分が一体何を言っているのか分からない。何を言いたいのかも分からない。

嗚咽する羅衣を、禍赦は抱きしめた。

禍赦の頬にも、涙がたっていた。

その体に、しがみつく。力の限りに泣き叫ぶ。

今、羅衣が頼れるものは、禍赦しかいなかった。大切な家族は、もう、禍赦以外いなかった。

全てが、遠のく。

足の痛みも。辺に鳴り響くサイレンの音も。自分達に掛けられる声も。

だが、それでも、禍赦の声は羅衣に届いた。

「羅衣が無事で、良かった」

禍赦が安堵の息と共に呟く。

その言葉は鮮明に、羅衣の心に届いた。しがみつく力が強くなる。

そんな羅衣を見て、禍赦は思った。

もう、これ以上羅衣を悲しませたくない。

救出されても、病院に行っても、禍赦は羅衣から離れようとしなかった。

羅衣も、禍赦から離れようとしなかった。

「……………あれ？ここ……………どこだ？」

気付くと、何かの台の上に寝ていた。

白い天井を睨み付け、考える。

「確か……………羅衣と一緒にいて……………」

記憶が鮮明になってくる。

「そうだ！そのまま寝ちまったんだ。……………あ。羅衣？羅衣……………が、いない？」

明らかに、そこは病室ではなかった。

真っ白で無機質な壁と天井は、何とも言い難い威圧感がある。

「嘘だろ……………。どこだよ、ここ」

「実験室なのだね」

ふいに、声がした。

見知らぬ男が、視界に入ってきた。

目がギラギラと異様に光った、不気味な男だ。

「もう、起きてしまったのだね。もう少し、寝ていていいだね。おやすみだね」

プツリ、と腕に何かを刺される。
ぞわり

背中からうなじにかけて、毛が逆立つ。

「嫌だ。羅衣！羅衣。羅……」

意識が、闇に引きずり込まれる。

禍赦はまた、深い眠りに落ちていった。

これが、2147年に羅衣13才、禍赦が15才の時に起こった出来事。

ブローグゝ雅砦ゝ 前編

コンコン

ドアを叩く音。

慌てて、問題集の上にあったものを仕舞う。シャープペンをひっ掴む。

「何？今勉強し」

ガチャッ

ドアを開けられた。

最後まで言っただけなのに。

ってか、勝手に開けんじゃねえよ。

そう思ったが、口にはしない。

それを言ったら最後、ゲンコツが降ってくるからだ。

「何？母さんが勉強しろったからしてんのに」

嘘を言っただけ、顔をしかめる。

「雅砦^{ガト}、電話よ！」

「誰から？」

架蓮^{カレン}に受話器を差し出された。受け取る。

「神蘭^{ミラン}ちゃんよ。ずいぶん慌ててたみたいけど」
「ふーん」

とりあえず、電話に出てみる。

「もしもし？神蘭？」

『うん。雅砥？』

とりあえず、母親の架蓮を部屋から追い出す。

「母さんいると喋りにくくなるから、部屋出ててくんねえか」

適当に理由をつける。すると、案外すんなり出てくれた。

「……分かったわ」

今度は、神蘭に返事する。

「そうだけど。どうかしたんかよ？」

『どうかしたって……。もしかして、ニュース見てない？』

「ニュースう？」

『今やってるから、早く見て！』

電話から聞こえる声は、いつもと違う。

架蓮の言う通り、神蘭は慌てていた。

「え？あ、ああ、分かった」

部屋を出る。リビングに行く。

そこには、架蓮がいた。

「あれ？どうしたの？」

話し掛けられたが、無視する。テレビを点ける。
確かに、ニュースをやっていた。

内容は、数十分前の交通事故。
交通事故なんて珍しい。

車の事故防止の性能は、年々上がっている。それと共に、交通事故
発生回数は減っていた。

「交通事故が、どうかしたんかよ？」

「分かんないの？よく見て！」

「はあ？よく見るつつたつて……どこをだよ」

「車よ、車！」

動揺しているのか、言っている事が分かりにくい。

「車あ？何お前、そんなにパトカーとか救急車好きなんかよ」

「違う！事故でペシャンコの車！」

「はあ？そんなにペシャンコの車好きなんかよ、お前」

「ちーがーうー！何で分かんないんだよ！？」

「何を？何がしてえんだ、お前。喚きてえんか？」

「何回違うつて言えばいいんだよ、もう！」

「何が違えんだ？」

「車よく見て！」

じつと黒い車を見詰める。

運転席の所が、綺麗にペシャンコになっている。

民家へ突っ込んだようだった。

グシャグシャになって歪んだ車は、握り潰した黒い折り紙にも見える。

「……んで、このペシャンコの車がどうかしたんかよ」

『あーもう！何で分かんないんだよ！？』

「分かんねえもんは分かんねえよ。お前、何が言いてえんだ？」

『車、似てるでしょ！？』

「ああ、確かに。潰れたゴキブリに似てんなあ」

『いやああー……っ。ゴキブリは駄目！ゴキブリの話はやめてええええ』

ゴキブリが大嫌いな神蘭が叫ぶ。

キーーーーン

耳に鋭い痛みが走る。思わず、涙が滲む。

すげえ大音量だな。あー、耳痛え。

そう思いながら、雅砥も負けじと言い返す。

「先に言ったんお前だろおが」

『ゴキブリなんて一つ言も言ってないっ』

「この車……」

雅砥が口を開く前に、横から声が聞こえた。

テレビから視線を移す。

そこには、架蓮がいた。

食い入るように画面を見詰めている。正確には、画面に映る、黒い乗用車。ペシヤンコの車だ。

「この車、概螺の車に似てないかしら？」

架蓮が呟く。雅砥は眉をひそめる。

「概螺って……羅衣の父さんだよな。この車は羅衣の父さんの車、

つつつ事なんか？」

『やつと分かったの！？』

「お前が最初っから言やぁ良かったんだ」

『分かんなかった雅砥が悪いっ』

また口喧嘩を始めた2人。

「うつせえ。お前が」

「羅衣君、今日家族でドライブ行ってくて言ってたわよね」

雅砥を遮るように、架蓮が呟く。

「え？」

「ほら、この前羅衣君が遊びに来た時、言っていたじゃない。『久

しぶりに家族皆でドライブ行くんだった』って、嬉しそうに」

ハツとする。数日前の出来事が脳裏をよぎる。

そうだ、確かに言ってた。

「……やべえ」

『は？どうしたの？』

「やべえよ！」

『何がやばいの？』

「羅衣が、羅衣がやべえ」

『はぁ？羅衣がやばい？何言ってるんの？』

今度は、雅砥が動揺している。

「羅衣も、死んじまつてるかしんねえ！」

『はあ？何で羅衣？』

「ほら、電話貸かして！」

架蓮が受話器を雅砥の手から、ひったくる。

「あ」

雅砥は、半分パニック状態だった。

受話器を取られ、拍子抜けしたようにポカンとする。

「もしもし。神蘭ちゃん？架蓮よ」

『あ、もしもし。雅砥のお母さんですよ』

「そうよ。雅砥は動揺しているみたいだから、私が説明するわね」

『はい。お願いします』

「神蘭ちゃん、知っている？羅衣君、今日家族でドライブに行く予定だったのよ」

『え。じゃあ……』

「そう。予定が変更になっていなければ、羅衣君もあの車の中に……」

……

『はっ早く、行かないと！』

「行ってくて、どこに行くの？」

『事故現場ですよ！羅衣も事故にあってるんですよ』

「でも、あの車が概螺のものだと決まった訳ではな」

『とにかく行きます！！』

神蘭の声に、架蓮が顔をしかめる。

遮られたからというよりは、声が大き過ぎたからだろう。

「神蘭ちゃん、でも……」

『「幼なじみが事故にあってるかもしれない」って分かってて、そ

れでも家でじっとしているなんて、無理です！とにかく、あたしは行きますっ」

「……分かったわ。その前に、連絡を取れないかやってみましょう」

架蓮が振り向く。

雅砥は、さつきからずっと「羅衣が……羅衣が……」と呟き続けている。顔色が悪い。

そんな雅砥に、声を掛ける。

「雅砥、羅衣君の家に電話して」

「え？……ああ、電話な。分かった」

雅砥が電話をかける。

束の間の沈黙。

先に口を開いたのは、神蘭だった。

『どうですか？』

「分からない。雅砥に聞いてみるわね。……雅砥、どうだった？」

「……電話に、出ねえ」

雅砥が、顔をあげる。

その顔からは、血の気が引いていた。

「羅衣君も誰も、電話に出ないそうよ。羅衣君の家に電話したのだけれど」

『じゃあ、やっぱり……。行かないと！今すぐ行かないと。雅砥に代わって下さいっ』

「え、ええ、分かったわ。……雅砥、電話代わって」

「あ、ああ。分かった」

雅砥が受話器を受け取る。耳に押し当てる。

「もしもし」

『あ、雅砥？』

「ああ」

『あたし、今から事故現場に行く。自分の車で』

「おれも、行く」

『分かった』

電話を切る。

「母さん、俺出掛ける」

「事故現場に、行くの？」

「ああ。いつてきます」

「でも……」

架蓮が何か言っていたようだったが、気にせず家を出る。
自分の車に乗る。

12才から乗れる、数年前に発売されたものだ。

目的地を打ち込む。

場所は、ニュースの映像で分かった。

車が自動運転で走り出す。

「……ここか」

車は、向こうに止めてある。

そこは、騒々しかった。

野次馬を警察が追いやっている。

ここからは、黒い車がどつなつたのかは分からない。見えないのだ。

「……雅砥っ」

ブローグ　ゝ雅砦ゝ　後編

振り向く。

神蘭がいた。近付いてくる。

「さっき警察に聞いたんだけど、相手にしてくれなかった」

神蘭の表情は、険しかった。

「だから、もつと偉い人に聞こうと思ってるんだけど……」

「偉い人つつたって、会えねえんじゃねえか？」

警察がいる。あの人数の目をかいくぐるのはほぼ不可能だろう。

「あの車から出るのを、待ってたの。偉い人っぽい人がさっき入っていったから」

神蘭が指差す。

そこには、妙に大きい車が停まっていた。

車体は灰色。窓が黒い。

中が見えないになっているようだ。

「ふーん。それが一番いいかもな」

「でしょ？」

「ああ」

灰色の車へと近付く。

「ここが限界じゃねえか」

「うん。そうだね」

野次馬に紛れてあの車を見詰める。

「うわぁ……。すごいな」

「え？」

雅砥が見ているものへと視線を移す。

「うわ……。本当だ」

ペシャンコの車は、間近でみるとやはり、インパクトがある。

それに、ニュースでは気付かなかった事も、気付いてしまった。

車の前の方が、赤い。運転席の辺りが一番、酷かった。

割れて散ったガラスは、血で薄く染まっている。フロントガラスには、ベトリ血糊がついていた。夥しい血の量だ。

「……確かニュースでは、2人頭部強打で即死だったよな」
「うん……」

話している間にも、車は片付けられていく。

「あ」

「どうした？」

「出てきたっ」

「えっ」

妙に大きい車へと目を走らせる。

白衣を着た男が出てきた。

「なんか、アイツ怪しくねえか？」

男のは、妙にキラキラ輝いていた。

うつわぁ……。すっげえ不気味い……。

思わず、顔が引きつる。

「あの、すみませんっ」

神蘭の声が耳に入る。ハツとする。

「おいっ。聞いてんのか」

って、全っ然聞いてねえーっ。

神蘭が白衣の男に話し掛ける。

「事故にあつたのって、羅衣ですか！？」

「羅衣だね？……えーっと……ああ、羅衣君の事だね？」

雅砥が目を見開く。

何コイツっ。

喋り方めちゃくちゃ変じゃねえか。ってか不気味！

男の瞳は、キラキラと底光りする。

だが、神蘭はその目をまっすぐ見詰める。怖じ気づ付く事もなく。

「はい。そうです」

「君は、羅衣君の友達なのだね？」

「はい。そうです」

「羅衣君とは、仲が良いのだね？」

「はい。そうです。あの、羅」

「もしかして、羅衣君とは付き合ってたりするのだね？」

神蘭を遮るように、男は質問する。
相変わらず、男の目は光り続ける。

「はい。そうです。あの」

「そうか」

神蘭は、相当動揺しているようだった。

自分が間違えて答えている事にも気付いていない。

いや、違い。動揺してんじゃない。急いでんだ。それが、慌ててるか……。

「もしかして、羅衣君とはキスした事はあるのだね？」

男が出てきた車のドアは、開いていた。

野次馬ももう、帰り始めていた。

こっちは問題無いと思われているようだ。近くに警察がいない。

「はい。そうです。あ」

「もしかして」

2人は喋り続けている。

もしかしたら、あの車の中を覗けるかもしれない。

「羅衣君とはもうセ」

「すみません！！羅衣は無事ですか！？」

耐えられなくなった神蘭が叫ぶ。

そこにいた全員の注意が神蘭に向く。

今だっ。

雅砥が灰色の車のドアへと走る。

神蘭は、その事に気付いていない。

ちょうど、そこは男や野次馬、警察の死角だった。

「この女性、生存サンプルにしますか？それとも、殺してしまえますか？」

「仮死状態生存サンプルにしておいて下さい。爛佳様がそう言っていました」

「分かりました」

車の中からは、会話が聞こえる。若い女と男の声だ。

雅砥が中を覗き込む。

「……うつ……」

思わず、声が漏れる。

そこには、概螺と御籠が寝かされていた。血まみれだ。特に、概螺が酷い。

頭の右側が、ベコツとへこんでいる。鼻も折れていた。もう、ほとんど原型を留めていない。血やら何やらで、グチャグチャだ。

御籠は、額から血を流していた。

腕、首、胸、あらゆる所から、チューブが伸びている。

それは全て、近くにある機械に繋がっていた。

車内は、真っ白だ。床も壁も天井も、全て。

だが、窓だけ黒い。

そのせいか、妙な威圧感がある。

「あれ？何か、今さっき声が聞こえませんでしたか？」

雅砥に背を向けていた女が、首を傾げる。

「おれには、聞こえませんでしたよ。空耳じゃないですか？」

男が答える。

どちらも、白衣を着ていた。

やべえ。ここから早く離れねえと。

そつと首を引っ込める。

「そうですか？確かに聞こえたと思ったんですが……」

足音が、近付いてくる。

車から、体を離す。

「おれは全然分かりませんでしたよ。耳がいいんですね」

抜き足差し足で離れる。

「外の声かな……」

女が呟く。

後ろ歩きでさらに離れる。踵を返そうとしたその瞬間、ひょいっ

女の顔が出てきた。

目が合う。

「君、なんでそんな所に」

「あーっ。やっと見つけた！」

女を、聞き慣れた声が遮る。驚き、振り向く。

「雅砥、どこに行ってたの？探したんだからねっ」

「あ、神蘭」

「ほら、行くよっ。羅衣は病院にいるって」

神蘭に引きずられるように、歩きだす。

「雅砥、って名前なのね……」

女の呟きは、誰にも聞こえない。
車に戻る。

「ご報告があります」

女が男に向かって一礼する。

「一々鋭掠に報告しなくていいだね」

あの不気味な男も車に入ってきた。
女が、反射的に振り向く。

「爛佳様！戻られたんですね」

「そうだね。今ここで報告してだね」

「分かりました。報告します。先ほど……」

女が喋り始める。

その瞬間、決定的に雅砥の人生が変わった。

そして雅砥は、この事を誰にも言わなかった。

これが、2147年雅砥13才の時に起こった出来事。

ブローグ 〱 雅砮 〱 後編（後書き）

年が変わる瞬間に書いた文が、本文中の「夥しい血の量だ。」です。いやあ、これはナイですよすごい一年になりそうだなとか思いながら、携帯でポチポチ打ってました。

テレビが、ある意味悲しい理由で見れなかったものですから。

ブローグ ～神蘭～

窓を閉め、息をつく。

これで、家中の窓は全て閉めた。

今は、学校から帰り留守番中。

さっき急に降り出した雨は横殴りで、慌てて閉めて回ったのだ。

「……あれ？」

だが、まだ雨音が聞こえる。

どこの家もそうだが、この家も防音機能がある。普通は、雨音が聞こえるなんて事はない。

「……あ。お父さんの部屋！」

慌てて駆け寄る。鋭掠トリヤクの部屋のドアを開ける。

「うわぁ……。やつちゃった」

窓は全開。中は水浸しだった。

急いで窓を閉める。

濡れた所を拭き始める。

「……鍵？」

床に、小さな鍵が落ちていた。

“鍵……鍵……どこいった？”

“どうしたの？会社、遅刻するよ”

“仕方がないか。いつてきます”

朝鋭掠とした会話が、脳裏に浮かぶ。

「これ、何の鍵？」

首を巡らせる。

鋭掠の机の引き出しに目が留まる。

そこには、小さな鍵穴。

好奇心に駆られる。鍵を差し込む。

「あ。開いた」

カチャリ

鍵が回る。

駄目だよね。こんな事……やっちゃ駄目、だよね……。

と思いながらも、好奇心に負けてしまった。

引き出しを開ける。息を呑む。

あったのは、大量の書類。

さすがに、読むのは駄目だよね。

そう思っ引き出しを閉めようとする。

その瞬間、あるものが目に飛び込んできた。

‘人体研究機構報告書’

手が止まる。

「……何これ……。何なの、これ……」

もう、止められない。

読み始める。

1時間程たった頃、書類を仕舞う。

書類は、全て読んだ。

「……何なの……。何で……」

呆然とする。

衝撃で、まともな思考が出来ない。

立ち上がる。鋭掠の部屋を出る。

「ただいまー。ごめんね、神蘭。遅くなって」

ちょうどその時、静寡^{セイカ}が帰ってきた。

出掛けた帰りに、買い物に行ったらしい。

キッチンへとそのまま歩いていく。

「……お母さん、お父さんって……」

そんな静寡に、話しかける。

「お父さんが、どうかしたの？」

静寡が振り向く。首を傾げる。

「……何でも、ない」

「大丈夫？ 顔、青いよ？」

「うん……。部屋で、少し寝てくる」

「分かった。ゆっくりしててね」

「……うん」

静寡に背を向ける。階段を登る。

自分の部屋に戻る。

ボフリ

ベッドに倒れ込む。

「お父さんは、人殺しだったんだ」

呟く。

ふいに、目から何かが零れそうになった。

涙だ。

歯を食い縛る。

何で自分が泣きそうなのか、分からない。

憎んでいるのか。悲しんでいるのか。

「会社なんて、嘘だ。あの機構に行ってたんだ」

歯の間から、言葉を無理矢理押し出す。

奥歯を噛みしめる。

ズキン

胸の奥が、痛む。内側からえぐられているかのような痛み。

煮えたぎる思いを、必死に抑える。

神蘭の中の何かが、悲鳴をあげる。

ズタズタに、切り裂かれていく。ボロボロになり、それは崩壊していく。

心が、絶叫をあげる。だが、それが声になる事はない。

人体研究機構報告書。

あの書類の中身は、想像を絶するものだった。

「どうやったら……あんなに、残酷になれるの？」

何かが、固まった。涙の滲んだ目で、宙を睨み付ける。
神蘭は、決意した。

「あんな機構、ぶっ壊してやる」

歯を食い縛る。眼光が、鋭さを増す。

「あんな……あんな……所！」

人体研究機構報告書には、様々な事が書いてあった。
今までの実験内容、結果。
その中に、ある項目があった。

‘発声実験’

その生存サンプルに、ある名前が載っていた。

‘禍赦 15才’

そして、神蘭は知ってしまった。

これが、2147年、神蘭が13才の時に起こった出来事。

闇は、忍び寄る。

怖い。

気付くと、知らない人達がいた。何か喋っている。
だが、何を言っているのか、聞き取れない。

怖い。誰か。

自分がいる場所が分からない。
台のようなものの上に寝かされていた。
そこは、壁も天井も真っ白な部屋。
清潔感というよりは、威圧感がある。

怖い。助けて。

ふいに、叫びたくなった。
耐えられない。もうこれ以上、黙って、この恐怖に耐える事が出来ない。
口を開ける。
いや、違う。
口を、開けようとした。
呆然とする。

次の瞬間、これ以上にならない程大きい恐怖が襲いかかってきた。

怖い。怖い。怖い。

恐怖で埋め尽くされた心は、悲鳴をあげる。
だが、それが声になる事はない。

怖い。誰か。誰か助けて。

体が、動かない。指一本、動かせない。

「おや。目が覚めたのだね。どうだね、気分は？」

白衣を着た男が、近付いてくる。

「おっと、失礼しただね。君は今、喋れないだね。紗魅ちゃんだね」

男は、にっこりと笑う。

名前を呼ばれた。

「これから、いっぱい僕が遊んであげるだね」

だが、目が笑っていない。

不気味に、ギラギラと光っている。

嫌だ。来るな。怖い。

「爛佳様！あちらの雌の生存サンプルに、問題が！今すぐ来て下さい」

「なんという事だね。鋭掠、紗魅ちゃんの子守りをしておいてだね」

「分かりました」

鋭掠という男が、顔を覗き込んできた。

爛佳と呼ばれた最初の男が部屋を出ていく。

「今、ここにはおれ達しかない。ここから逃がしてあげる。体が

動くようになったら、そこに飛び込め。あれは非常用の抜け道だ。外に繋がっているはず」

鋭掠がパネルを操作する。

体から、何かが抜けるような感覚。

「……………。あ」

喋れた。ホツとする。

「ほら、立って」

鋭掠に助け起こされる。

「あり……………がとう」

だんだんと、体に力が入るようになってきた。

「そこに、入って。早く」

機械と壁の間に、隙間があった。紗魅は、言われるがままに、そこに体を押し込む。

「うわあっ」

そこには、穴があった。

バランスを失い、落ちる。

そこは、チューブのような所だった。

落ちるというよりは、その中を滑り落ちていく。

「イテッ」

尻餅をつく。

ここが、チューブの終点のようだ。

「ここから、登んのか？」

壁に埋め込まれた明かりのもと、ぼんやりと階段が見える。

紗魅は、登る。登り続ける。

突き当たり。階段の終点。

そこには、上から光が差していた。

低い天井を押す。

バコッ

簡単に、外れた。

「あ。ここ……」

階段は、外に繋がっていた。

見覚えがある。

えっと……ここは……。

そうだ！

ここ、家の近くのスーパーの裏じゃねえか！

「母さん……。父さん……」

紗魅は呟き、歩き出す。

すぐに、自分の家が見えてきた。

「……え？」

違った。

自分の家ではない。

自分の家だったものだ。

「な……んで……だ？母さんは？父さんは？」

世界が、グニヤリと歪んだような気がした。

紗魅の足元が、覚束なくなる。

フラッ

よろめく。

肩が、近くの壁にぶつかる。そのまま、寄り掛かる。

目の前にあるのは、燻る瓦礫。煙。大勢の人。

紗魅の家は、火事の後だった。

「可哀想に……。家族3人全員焼け死んだんだった？」

「でも、1人だけ残されるよりはいいよ」

「3人全員で天国行けるといいわね」

「『行けるといい』じゃないよ。もう、行ってるんだよ」

「そうね。紗魅ちゃん達、いい家族だったものね。絶対に天国行ってるわよね」

そんな会話が、聞こえる。

近所に住んでいる人達の声だ。

「そんな……」

焼け死んだなんて、嘘だ。

多分……いや、違えな。絶対、あそこにいる。

あたしは、逃げれた。だけど、母さんと父さんは？

“……あちらの雌の生存サンプルに……”

ふいに、さっき聞いた言葉が蘇る。

「そんな……。そんな……。……あたしだけなんかよ」

涙が、溢れる。

爪が掌に食い込む。

「生き残ったのは……」

両親の居場所は、分かった。

だが、そこから両親を出す事は、出来ない。
今の紗魅は、無力だった。

「母さん……。父さん……」

自分の家だったものに背を向ける。

フラフラと、歩き出す。あてもなく歩き回る。

これでもう、大切な人は1人残らず消えてしまった。

帰る場所も、居場所も、何も無い。

止めどなく、涙は流れ続ける。

声を押し殺して、泣く。

歩き続ける。泣き続ける。

あてもなく。止めどなく。

「よっしゃあ。家帰ったらゲーム三昧だぜ」

額に浮かぶ汗を拭う。

今日で、夏休み始まってから1週間だ。

「それにしても、暑いな。まだ7月だろ？」

誰に言うでもなく、呟く。

手には、袋。中身は今日発売された最新のゲーム。

「あれ？羅衣歩き？」

名前を呼ばれ、振り返る。

幼なじみの神蘭がいた。

「ああ、今車修理してんだよ」

「あ、そうなんだ」

「……ん？神蘭、今日補習だろ？」

「仮病使って休んだに決まってんじゃない。そう言う羅衣も補習じゃなかった？」

「ゲームの発売日に誰が補習行くか」

「ゲームオタクめ……」

神蘭がぼそりと言う。

「今何か言ったか？」

「空耳じゃない？……乗ってく？」

神蘭が、自分が乗っているものを指差す。

神蘭は車に乗っていた。

12才から乗れる、目的地を打ち込むと自動運転で連れて行ってくれるヤツだ。

だが、羅衣は首を振った。

「いや、いい。雅砥にお前と相乗りしてる所見られたら、面倒臭え」

「雅砥ってすぐ騒ぐからね」

「そついや、最近雅砥のヤツ見てないな」

「アイツ、学校2週間近く休んでるよね」

「まあ、雅砥の事だからそのうち『ズル休みしてたんだぜ。いいだろ』とか言って学校来るだろ」

「そうだね」

「じゃ、またな」

「じゃ〜ね〜」

神蘭が車で走っていく。

「よっしゃあ。家帰ったらゲーム三昧だぜ」

羅衣は、また同じセリフを言って、家へ向かう。

……良かった。

神蘭が、ホッと息をつく。

チラリ

振り向く。

角を曲がったから、もう羅衣は見えない。

「本当に、羅衣って鈍感だよな……」

だが、今回はそのおかげで助かった。

補習をサボッてうろろしている理由を聞かれたら、困る。

雅砥が話題になった時は、心臓が暴れ回った。

バレるはずがないと、分かってはいた。だがやはり、ハラハラするものなのだ。

……もし理由を説明したら、羅衣も巻き込む事になっちゃう。

そんなの、絶対に嫌。

無関係な人、ましてや羅衣を、この残酷な世界に巻き込むなんて、耐えられない。

自分1人なら、いい。耐えられる。

だが、羅衣にもこの重荷を背負わせる事を考えると、胸が締め付けられる。

絶対に、嫌。

あたしのせいで他人を巻き込むなんて。

ふと、神蘭はあるものに目が留まった。

「……何あれ」

車を止め、降りる。

路地の隅に、何かある。

だが、なぜか違和感がある。

そうつと近付く。

その瞬間、神蘭は驚愕に目を見開いた。

始まりは、出逢いから。

「だっ……大丈夫ですか？」

慌てて駆け寄る。

それは、少女だった。壁にぐったりと倒れ掛かっていたのだ。助け起こす。

「う……」

少女が、顔をあげる。

その濁った虚ろな瞳が、神蘭に焦点を結ぶ。

「だ……れ？」

「あたしは、神蘭。大丈夫？」

「だいじょうぶ……ぶ。あたし……紗魅」

「紗魅、ね。……あ。顔、青いよ。全然大丈夫じゃないじゃん。あたしの家来なよ。ほら、乗って」

「だい……じょうぶだって」

「いいから、乗って」

「いや……」

「いいから、乗れ」

神蘭の目が鋭い眼光を放つ。紗魅が、ウツと詰まる。

「……はい」

「はあ、はあ、はあ、はあっ……」

目の前を、見知った姿が横切る。
神蘭とはさっき別れたばかりだ。

「あ、雅砥！こんな暑いのに、何で走ってん……って無視すんなよ！」

雅砥は羅衣には目もくれず走っていく。
それに、羅衣はムカツときた。追いかける。

「はあ、はあ、もう巻いて……うわっ。まだ巻いてなかった！はあ、はあ、今度は、はあ、違う人だあ」

「おい！何で逃げんだ？」

「……はあ、はあ……うわあっ」

雅砥が、無様に転ぶ。

羅衣が雅砥に追い付いた。立ち止まる。

「ずいぶん派手転んだな。大丈夫か？」

羅衣がかがみ込む。雅砥がビクリと肩を震わせる。

「……ごめんなさいごめんなさい何だか分からないけどごめんなさい。だから殺さないでお願い。何でもするからあっ」

雅砥が一気に言った。

声が裏返っている。おまけに、半泣き状態だ。

「……は？雅砥、お前何言ってた？」

何かの冗談かと思った。

だが、この必死な顔は、嘘をついているとは思えない。
とりあえず、雅砥に説明する。

おれが説明してもらいたいんだけどな。

そう思っているが、今の雅砥に説明してもらえないはずがない。

「おれは、お前を殺つたりはしないよ」

「本当？」

雅砥の目が真ん丸になる。

「ああ。それに、何だか知らないけど殺られそうなら、匿ってやるよ」

「本当!？」

雅砥の顔が明るくなる。

「もし、おれがお前を殺る気だったら、もう殺ってるだろ。……ほら、立て。おれの家行くぞ」

「あっありがとう」

雅砥の目がキラキラと輝く。

コイツ、本当に雅砥か？

ふと、疑問が心の片隅を過る。

雅砥って、こんなに素直だったか？
もっとひねくれてた気が……。

羅衣が、考え込む。

雅砥はその事に、全く気付いていない。

「……まあ、いいか」

呟く。

雅砥が、首を傾げる。

「何？」

「いや、なんでもない」

どこか吹っ切れたような顔をして、羅衣が笑う。

「とりあえず、おれの家に行こうか」

ガチャリ

神蘭が玄関のドアを開ける。

紗魅もその後から家に入る。

「お邪魔します」と言ったが、誰にも聞こえなかったようだ。

「ただいまー」

「おかえり。補習は？」

「さつき終わったばかり」

平然と嘘をつく。

紗魅が「えっ」という顔で神蘭を見やる。
だが、神蘭は全く気にしない。

「ずいぶん早いね。どうだった？」

「いつも通り」

「そうなん……あら？そこにいる子は？」

やっと静寡^{セイカ}が紗魅に気付いた。

あたし、さっき「お邪魔します」つつただけど。

紗魅はイラッときたが、顔には出さない。

「紗魅だよ。あたしより1つ年下」

何でわざわざ年下だって事言っただよ。意味分かんねえ。

また、イラッときたが、顔には出さない。

「14才なのね。友達？」

「うん」

静寡が紗魅に微笑みかける。

「紗魅ちゃん、こんにちは。神蘭の母の、静寡です」

「あ、こんにちは」

「それじゃ、部屋行ってるね」

神蘭が靴を脱ぐ。

「分かった。紗魅ちゃん、ゆつくりしてってね」
「はい、ありがとうございます。お邪魔します」
「ほら、行こ」

神蘭が紗魅を引っ張る。

「あ、ああ」

紗魅も、慌てて靴を脱いだ。
階段を登る。

神蘭の自室は、2階だった。
部屋に入り、ドアを閉める。神蘭がくるつと振り帰る。

「紗魅、教えて！」

「え？」

「何であんな所に倒れてたの？」

「それは……」

始まりは、出逢いから。（後書き）

ちなみに、神蘭が、紗魅が自分より年下だと言ったのは、私の力不足のせいです。

最初から、神蘭は15才、紗魅は14才という設定だったのですが、それが小説に出てこないということで無理矢理入れたらこうなりました。

なんかものすごく不自然ですね。すみませ

「ふざけんな！ テメエのせいかよこの野郎！」

うわーーーーっ！！

紗魅が本文から脱走した！

ってか、何で後書きに紗魅がいるの！？

「知るかつ」

ええーーーーっ。

「それよりっ」

（それより！？ 紗魅が後書きにいることって、問題じゃないの！？）

「こんな駄文書いてんじゃねえーーーーっ！！」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい。ヒーーーーっ。

「紗魅乱入、暴走のため、強制終了します」

登場人物、紹介します。（前書き）

前回の後書きで紗魅が暴走したので、登場人物紹介してみました。
ネタバレの可能性有りなので、それが嫌な人は読まないで下さい。

それではっ！

私、生まれて初めての人物紹介です。

何かどっか変でも、「ああ、コイツ馬鹿なんだな」とか適当に思っ
といて下さい。

登場人物、紹介します。

2149年の時点での紹介です。

羅衣^{ライ} 15才

13才の時両親を事故でなくす。
ゲームオタク。鈍感。

神蘭^{ミラン} 15才

13才で、父親が人体研究機構に入っている事を知る。
睨むと目が怖い。紗魅でさえビビる。
好奇心旺盛。

雅砥^{ガト} 15才

13才で、概螺の死体と御籠の惨状を見てしまう。
それが理由で、人体研究機構から危険視される。
昔はひねくれていた。
素直。

紗魅^{サミ} 14才

両親を捕らえられたが、助けられない。

紗魅だけが助かった。

帰る家が無い。

口が悪い。

禍^{カシヤ}赦 17才

羅衣の兄。

爛^{ランカ}佳

不気味な男。

目がギラギラ光っている。

概^{ガイラ}螺

羅衣の父親。

2年前に交通事故で死亡。

御^ミ籠

羅衣の母親。

2年前、概螺と同様、死んだはず。

鋭^{トリヤク}掠

神蘭の父親。

人体研究機構に所属。

静寡^{セイカ}

神蘭の母親。

架蓮^{カレン}

雅砥の母親。

悲しみは、涙となって。

紗魅が黙り込む。

嫌な記憶が蘇ってきた。また、涙が零れそうになる。

「……………紗魅？」

齒を食い縛り、堪える。

「……………何でもない」

「そっか……………」

「紗魅って、どこ住んでんの？」

神蘭が、聞く。

話題を変えようとしたのだ。だが、逆効果だった。
紗魅が、唇を噛む。

答えたら、駄目だ。本当の事を言ったら、駄目だ。
また泣き出しそうになっちまう。

そう思った。

なのに。

「……………あたしは、もう、どこにも住んでない」

虚ろな瞳。空虚な声。

気付いた時には、もう答えていた。

神蘭がポカンとする。

「え？」

「あたしには、帰る場所がない」

抑えきれず、声が震える。

紗魅が、歯を食い縛る。手を握りしめる。

掌が鈍く痛む。

爪が食い込んだのだ。

「家が、ないの？」

神蘭は、目を見開く。

泣いちまう。

駄目だ。これ以上、言ったら、泣いちまう。駄目だ……。

だが、意に反して紗魅の口は、動く。

言葉を紡ぐ。事実を言葉へと変える。

「家族も、もう何も……ない」

ふいに、涙が零れた。ボロボロボロボ口出てくる。

唇を噛む。ぎゅっと目を瞑る。

それでも、歯の間から嗚咽する声が漏れる。

瞼を押し開けて、涙が溢れてくる。

虚ろな瞳に、色濃い悲しみが現れる。

「……ごめん」

口を開ける。泣き声が漏れる。

何で神蘭が謝るんだ？

そう聞きたかった。

でも、出来ない。

こんな状態で、喋れるわけがなかった。

「ごめん。あたし、嫌な事思い出させちゃったんだね。ごめん」

神蘭は、謝り続ける。

紗魅が嗚咽する声が、部屋に響く。

神蘭が紗魅の手を握った。ゆっくりと、その手を開く。

そこには、くつきりと付いた爪の痕。

「ごめん……。紗魅、我慢しないで。思いつ切り泣いた方が、すつきりするよ」

止める……。止める……。

これ以上、あたしに優しくするな。これ以上、されたら……。

だが、それは意味のなる声にならない。

紗魅の口から出るものは全て、嗚咽する声だった。

「いいんだよ、泣いて。ほら、思いつ切り泣いて。誰にも聞こえないんだから」

家は皆、高い防音性がある。

神蘭が、背中をさする。

紗魅の泣き声が一層大きくなる。

しばらくして、だんだん紗魅が落ち着いてきた。

「ごめん。本当に、ごめん」

「……いや、いいんだ。思いつ切り泣いて、すっきりした。ありがとう」

紗魅が目赤くして、笑う。

紗魅は、別人のように明るくなっていた。

「何で、おれなんか言うの？あたし、紗魅を泣かせ」

「いいんだ。それに、あたし分かった事があるから」

神蘭の言葉を遮る。

「分かった事？」

「そう。あたし、ずっと聞いて欲しかったんだ。やっと、分かった。

……あたしの話、聞いてくれるか？」

「もちろん」

神蘭もやっと、笑顔になる。

「……あたしには、もう家族がない。何だか分からないけど、何かの組織に閉じ込められてるはず」

「……組織……。人体研究機構の事？」

「人体研究機構？何だそれ」

「生きた人間を生存サンプルとか言って実験する奴らだよ」

「……そいつだ」

紗魅が呟く。神蘭がキョトンとする。

「え？」

「そいつらだよ！絶対、そうだ！」

「どういう事？」

「あたしを実験しようとした奴らが、人体研究機構だったんだ！」

「えっ。紗魅をサンプルにしようとしたの？」

「ああ。あたしの両親も、サンプルにされてるはず」

「……あれ？」

神蘭が首を傾げる。

「ちよつと待つて。紗魅は、一回閉じ込められたって事？」

「ああ」

「どうやって出てきたの？」

「実験してる鋭掠って男に逃がしてもらった」

神蘭は呆氣にとられて、紗魅を凝視する。

「……鋭掠？」

ややあつて、神蘭が聞き返す。

だが、紗魅はその事に気付かない。

「ああ。抜け道知ってたし、実験首謀者っぽい人からあたしを任せられてたから、位は上の方だと思う」

その時になってやっと、紗魅は神蘭の様子に気付いた。
紗魅が、眉をひそめる。

「どうした？」

「それ、あたしの……お父さんだ……」

紗魅の表情が固まる。

神蘭の言葉を理解出来なかったらしい。

数秒の沈黙。

やっと歯の間から押し出した言葉は、一言。

「え？」

「鋭掠は、あたしのお父さんなの」

「同性同名の人って可能性は？」

やっと呑み込めたのか、紗魅が普通に質問する。

「ないと思う。あたしのお父さん、人体研究機構報告書持ってた」

「人体研究機構報告書か。やっぱり、上の方なんだ。でも、何であたしを逃がしたんだ？」

「分かんない」

「そもそも、実験の目的は？」

「分かんない」

「首謀者は……」

「分かんない」

「あ、あたし知ってる」

「誰？」

パッ

神蘭が顔をあげる。

「多分、爛佳って奴だよ」

「爛佳か……」

「心当たりは？」

「ない」

「謎だらけだな」

「うん。でも、あたし……」

「何？」

「……あたしの話も、聞いてくれる？」

「もちろん」

紗魅が、笑う。

神蘭が話し始めた。

「あたし、お父さんの尾行した事あるんだ。それで、場所は分かった。だから、昨日の夜、お父さんのカードを使って侵入した」

「カード？」

「身分証みたいなヤツ。あれのおかげでスイスイ入れたよ」

「そんなのあるのか……」

「うん。それで、雅砥を出した」

「雅砥？誰それ」

「幼なじみ。見つけた時にはもう、記憶喪失になってたけど……」

「記憶喪失か。その雅砥とやらは、どこにいるんだ？」

「それが……」

神蘭の目が宙を漂う。

「分かんない」

「え」

紗魅絶句。

紗魅の視線を避けるように、神蘭はあらぬ方向を向く。

「逃がした時、凄いスピードで猛ダッシュしてっちゃって……見失った」

「えへへ」と神蘭が引きつつた笑みを見せる。

おい。

笑い事じゃねえだろ。大丈夫なのかよ。

紗魅は、顔が引きつるのを必死で抑える。
真面目な顔をつくる。

「じゃあ……」

「うん。今どつかでフラフラさ迷ってると思う。だから、探してたんだ。その時に紗魅を見つけたんだよ」

「そうだったのか……。よし。それじゃあ、探しに行こう！」

バッ

紗魅が、勢い良く立ち上がる。

「え」

「それから、人殺し実験大好き集団ぶっ殺しに行こう！」

神蘭が眉をひそめる。

「人殺し実験大好き集団？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3265z/>

人殺し実験大好き集団

2012年1月8日20時45分発行